

# 日本人口論小史 (Ⅱ) (4)

第三人口論Ⅱ「純正」社会主義と  
その社会ダーウイニズム的屈折

市原亮平

## 目次

- (一) 北輝次郎「純正社会主義」と社会進化論
- (二) 「純正社会主義」と第三Ⅱ中間派人口論
- (三) 「純正社会主義」と第三Ⅱ中間派国体論  
(↓絶対主義的国体論Ⅱ家族国家観批判)

## 〔一〕

北陸の孤島佐渡ヶ島は自由民権運動以来、民権論の遺物はつよく残っていたが、北一輝の係畧にもまた自由党のイデオログがあり、彼はこの種の影響をうけつつすでに中学時代に天皇批判の詩を新聞に掲げた。やがて社会主義的傾向をつよめるが、明治三十九年、二四才にしてはやくも「国体論及び純正社会主義」の大著を世に問い、河上肇、福田徳三、矢野竜溪、田川大吉郎等を一驚せしめ、福田は「此書マルクスの資本論に及ばずと雖も、其他の平凡者流を抜くこと一頭地<sup>(1)</sup>」とまで激賞、さらに片山潜、幸徳秋水、堺利彦等の知遇さえ得ているのである。

片山潜は「国家の存在を否む今の社会党諸氏」と同行しえない、とした北の「純正社会主義」を認めて、雑誌「光」で過褒の

筆をとつたのである。——「是れ……我邦社会主義に関する著書中最大なるものなり。其内容如何は暫らくおき、著者が之に向つて費したる研究と能力は莫大なる者にして、吾人は社会主義の爲に感謝せざるを得ず……」著者は巻頭に於て「国家の存在を否む今の社会党諸氏」の語あり、万国社会党は決して国家の存在を否認する者にあらず。我々は常に我主義実行の手段として普通選挙を主張せり。其目的は議会に多数を得て社会主義の政策を執行せんとするにあり。……「未だ社会主義の忠僕北輝次郎君其人に面会の栄を得ざるも……我社会主義が氏の如き有力なる同志を得るを快とする者なり。其著書中万国社会党大会の決議に反対せらるゝの一事に就ては、他日進んで教へを乞ふこととして、今日……氏の社会主義の発展に向つて供献せられたる功を多として且感謝するのみ」と。北はこれらの知遇——三九年十月の北の一書簡には「小生塚君、幸徳君の情誼も考え、春より新聞社（平民新聞のこと——市原）へ入るよう致すかも知れず」とある——にもかゝらず「社会民主主義の忠僕」とはなり得ず、自ら社会主義の「純正」性の清算をおこなうことなく、ついに運命の赴くまゝに中国革命運動に参加し逆に「純正」性を強化していくのである。

社会進化論の風化作用をこうむり屈折せしめられた国家社会主義を自ら「純正」と称した彼の驕傲は、国家革命の試練をへて帰朝した大正十五年には青年将校を国家改造の経典として随喜せしめた「日本改造法案大綱」となつてあらわれるのであるが、われわれは彼の後半生を決定づけたかにおもわれる理論的根拠を「国体論及び純正社会主義」から析出することから始めよう。彼は「純正社会主義」中にどのように社会進化論を媒介せしめているか。

「今日、社会民主主義に対する科学的哲学的根拠よりの非難は生存競争を廢滅せんと企図する者なるが故に、生物進化論の原理に反する空想なりと云ふことにあり。是れヘツケル、ベンチャミン・キッド等により唱へらるゝ所にして大問題なり。」<sup>(4)</sup>

北はダーウィンとマルクスを背馳せしむべからずと高唱して、社会主義社会においてもとより生存競争あり、と。しからば、いかなる生存競争が存するのか。彼はいう、社会主義は社会の一分子たる個人の手中に万有進

化の大権を掌握せしめ、ひとしく分子である他の個人の權威を蹂躪することの甚しい死刑淘汰のような、社会進化を阻害するような生存競争をやめさせ、個人単位の個体延長のための生存競争、すなわち人類理想実現の唯一の途たる自由平等な雌雄競争を盛行させ、万有進化の大権を社会全分子の手中にゆだね、世界聯邦を成立させて食物競争の国家間、人種間における存在形態である殺戮戦争を廢滅させるのである、と。<sup>(6)</sup> しかれば社会主義の理想郷たる雌雄—恋愛斗争が自由平等に展開される世界聯邦はどのようにして建立されるのか。——

「歴史に意義なきものなし。斯の点に於て今日までに行はれたる国家競争が征服併呑の形に於て進化せしめたる——印ち社会学者の所謂同化作用によりて個体の階級を高める今日までの大国家に進化せしめたるは固より事実なり。故に吾人は帝國主義を以て歴史上社会進化の最も力ありし道程たることを強烈に認識す。而しながら同化作用と共に分化作用あり。外部的強迫力によりて同化するより外なりし国家競争の進化たる分化作用によりて其の同化作用を阻害せられ、又外部よりの同化作用に強迫さるゝことの爲に分化作用を圧迫せられて、社会の進化に於て誠に遅々たりき。——社会主義の世界聯邦国は国家人種の分化的發展の上に世界的同化作用を為さんとする者なり。故に自国の独立を脅かす者を排除すると共に、他の国家の上に自家の同化作用を強力によりて行わんとする侵略を許容せず。——この点に於て、社会主義は国家を認識し従つて国家競争を認識す。吾人は生物進化論を唱へたるダーキンと同時に於て社会進化論を説けるマークスの偉大を尊ぶものなりと雖も、彼等よりも進化せる現代の人として彼等の言を信仰個条とする者に非らず、階級斗争と共に国家競争を事実のまゝに認むる者なり。階級は横断の社会にして、国家は従断の社会なればなり。」<sup>(6)</sup>

かくて北はいう、同化作用によつて階級間の障害はやがて掃蕩せられ、小国家群の対立が歴史の進化によつて消滅するとともに、生存競争の単位たる個体の階級を分化作用によつてたかめその競争内容を進化させるのであり、わが社会主義の世界聯邦論は反乱や暗殺なる形態をとりきたつた競争形式を廢し聯邦議會の票決にゆだね競争単位

を世界万民單位にまで進化させんとするものである、と。

一方北は「階級斗争の歴史学及び倫理学」について「各階級は各異なる階級的利害を有し、階級的知識階級は感情を有し、階級的良心を有す。——斯くの如くなるを以て階級斗争の良心と階級的良心との衝突は恰も宗教を異にし道徳を異にせる時代の国家が其の地方的良心の衝突を戦争に訴えて決するより外なかりし如く、階級斗争は法律戦争による強力の決定の外に途なし。」と述べ、さらに「日本の国家社会党は全く階級斗争につき無知なり」と題し、「この階級斗争の歴史等と倫理学とを解せざるが為めに、維新革命を以て封建諸侯が尊王忠君の為めに政權と土地とを奉還せるものとなし、其れの如く今日の經濟的大名階級に向つて其の生産權と土地生産機關とを國家に——或者は天皇に——奉還せしめんと論ずる講壇社会主義者を見るなり。国家社会党の領袖山路愛山氏の如き其の土人的歴史家なる点に於て斯る議論の著しき代表者なり」(7)「天地万有ただ『力』なり。社会は強力によりて動く。勝てば官敗くれば是れ賊。凡ての善悪は階級斗争の決定なり。社会民主主義を真に知れるものは明らかに覚悟すべし——今日の時代に於ては社会民主主義は罪人也」(8)と国家社会党の中立、國家觀を筆誅し、階級國家觀を声高に叫んでゐる。この声の赴くところ、緒言で「本書の力を用いたる所は所謂講壇社会主義といひ国家社会主義と称せらるゝ鶴的思想の驅逐なり」(9)と斗争宣言したごとく、「この森嚴なる權利問題の前に下劣なる講壇社会主義なる者は資本対勞働の調和と云ふ。あゝ資本対勞働の調和——何ぞ公武合体論に似たるや！若し貴族諸侯の土地が掠奪なることを日本歴史によりて、知らざりしならば、而して資本が勞働の掠奪なることを『資本論』によりて知らざるならば、公武合体論は今日に存在すべく、資本対勞働の調和は地球と共に永遠の制度たるべし」(10)と講壇社会主義を「打撃的折伏的口吻を以て征服」、その極「革命は斯る公武合体論者を蹴散らして進む」とさえ激語した北が、な

ゆえ天皇機関説の虜となり国家社会主義の亜流に墮し去つたのか。まづ第一に彼の社会進化論の風化作用にもとづいたのであつて、それを北は日本に適用して中江兆民流に古代—君主国時代、中世—貴族国時代、維新以後—民主主義国時代と段階把握するのであるが、かくて現代において天皇は民族有機体の終極目的に從属し行動する「民主的國民」として国家有機体の最頭部に座し、明治二十三年以降は頗る進化して帝國議會とともに最後機関を組織する要素となり終へた、として進化の過渡的段階として容認するのである。第二に社会進化論の世界聯邦社会主義にいたる世界史的適用にもとづく屈折であつて、帝國主義はこの進化の窮極目標にいたる迄の必然的な階梯として容認されるのである。すなわちいう、「權威なき個人の礎石を以て築かれたる社会は奴隸の集合にして社会民主主義に非ざる如く、社会主義の世界聯邦論は聯合すべき国家の倫理的独立を単位としてのことなり。百川の海に注ぐが如く社会民主主義は凡ての進化を繼承して始めて可能なり。個人主義の進化を承けずして社会主義はなく、帝國主義の進化を承けずして世界主義なく、私有財産制度の進化を承けずして共產社会なし。故に社会民主主義は今の世の其等を敵とせずして凡てを包容し凡ての進化の到達点の上に建てらる。」<sup>(11)</sup>と。

北が純正社会主義を絶叫した年——明治三十九年は日露戦争の勝利によつて極東における軍事的地位をたかめ、中国を收掠する特殊便宜の独占性を意識する憲兵国家に完全になりあがつた日本が、戦果自体を資本蓄積の巨大な源泉としながら「第一階梯的端緒的金融資本」を成立せしめた年<sup>(12)</sup>であり、彼もまた「盛なる哉所謂帝國主義の流行」に唱和した一人であつた。——

「社会民主主義は階級斗争と共に国家斗争の絶滅すべきを理想としつゝあるものなり。而しながら……經濟的境遇の甚しき相違と精神的生活の絶大なる変異とが世界聯邦の実現及び世界的言語によりて掃蕩されざる間、社会主義の名に於て国家斗争を無

視する能はず。……然るに彼の矯々として戦勝熱の沸騰せる中に立ちて非戦論を唱えたる日本社会党の志士及び彼等の云為を材料として日露戦争を否認せし万国社会党大会とは、実に事実を無視するの甚しき、日露戦争とは単に満洲朝鮮に利害を有する資本家の恣に起したるものなるかの如く解す。日本の渺たる三井岩崎が今日斯る力ありと考うるならば直訳的慷慨も極まる。南阿戦争が大に英国資本家の利益に動機を有したることは事実なりと雖も、日本資本家の利害の日露戦争に於て有したる動機の如き誠に微力なり。吾人は断言す——日露戦争の動機の多くは国家的権威の衝突にして戦争を要求したる根本思想は実に尊王攘夷論の継承にありと<sup>(13)</sup>」

他方北は「現実の日本国なるもの天皇主権論の時代にもあらず国家主権論の世にもあらずして、宛として資本家が主権を有するかの如き資本家万能の状態なり。大臣も資本家の後援によりて立ち議員も資本家の願使によりて動く。斯くの如くにして国家の機関が国家の意志なりとして表白しつゝある所は、国家の目的理想の爲めに国家が執らんとする意思にあらずして自己若しくは自己の階級の利益のみを意識して意志を表白するを以て事実上は階級国家となれり。即ち今日の階級とは資本家地主と云ひ小作人労働者と云ふが如き経済的階級国家にして……今や資本によりて他の資本家と国士農とを併吞せる経済的家長君主等は往年の其等に代りて国家の機関を自家の階級の恣に取扱ひつゝあり<sup>(14)</sup>」<sup>(15)</sup>といひ、「国家の爲めとは国家全部の爲めか上層一部分の爲めか」と反問して「『国家の爲め』とは国家对国家の場合のみにあらず、国家の大部分を虐殺しつゝある今の経済的貴族を顛覆する時は要求せらるべき森厳なる叫声なるぞ。資本家政府と地主議會との共犯を拳国一致と云ひ、贓品分配の喧嘩を官民の衝突と称せらるゝ今日<sup>(15)</sup>」とも述べ、既述したように山路愛山『国家社会党流の国家観』とは異別の階級国家原理を激語している。——これが易々として日露戦争『尊王攘夷論』<sup>(16)</sup>、国民戦争なる帰結と無媒介に握手せしめた秘密こそ北の社会主義が

「純正」たりし秘密でもあつたのであり、社会進化論こそその触媒として恰好のものであつたとしなけれしならぬ。

以上われわれは北の「純正社会主義」が日本国家社会主義の一般的甲羅である社会進化論のプリズムをとおしてマルキシズムとダーウィニズムとの完全な同一視、社会ダーウィニズムとの混淆に立脚して天皇機関説やひろく世界帝国主義を進化の階梯として容認しつゝ国家社会主義の亜流に墮しきつたことをあきらかにした。(補註) われわれはさらに「純正社会主義」から帰納した右に考察したような基礎視点がいかように彼の人口論に投影しているかを次に考究するであらう。

〔補註〕 国家社会主義の徒、北の名誉のためにこゝで一言北イニズムと日本国家社会主義との関連、彼の占める思想的水位を確定しておこう。すでに前稿で述べたように明治二十年代の日本主義者三毛雪嶺等と明治三十年代の日本主義の徒木村鷹太郎、高山樗牛等との偏差は前者が前代の上流の民権論<sup>(16)</sup>自然思想を尚媒介せしめていたのに、後者はそれ等をまったく放棄しさり粗野な帝国主義の讚美者、官製の国家主義者に化しきつていた一点にのみ存した。山本勝之助氏が日本国民主義の潮流として二分しているように、樗牛、木村鷹太郎、蘇峯等をはじめ降つて昭和年代の三井甲之、蓑田胸喜等狂熱の日本主義者の一群と山路愛山、斯波真吉、さらに北一輝等の国家社会主義者の一群とを、前者を民意を媒介せしめない官府の国家主義、後者がある程度民意を媒介し得、民衆に膺接することのできた在野の国民主義、と規定することによつて分別できるのである。北のばあい、在野の国民主義者としての性格はどのようなものであつたか。日本ファシズム運動の一特質として、農本主義イデオロギーの要素が圧倒的につよく、労働者にたいする関心がいちじるしく稀薄なことがあげられているが、これは日本ファシズム運動——厳密にいえば近代的国民主義以前の、前期的国民主義運動<sup>(18)</sup>——の社会的基礎が半封建的農村の小支配者層<sup>(17)</sup>宇宙主にあつたことを意味するのである。——彼等こそ資本主義の一般的危機以降とくに尖鋭に、高度独占資本主義と半封建的農業関係との体制的矛盾を農本主義

小宇宙主のプリズムをとおして屈折的に把握しつゝ、統治勢力よりよりラジカルに、よりウルトラに国民主義運動を駆動せしめていつた階級的基礎であつたのである。絶対主義は不断に反レジーム的に反衆運動がつきあけてくるとき、これを半官半民のあるいは国家主義の諸団体をおして屈折せしめ権力とは同質的な党、内野、党的な圧力に馴化させるのであり、その手段としてこれら諸団体の農本主義的幹部はレジームの動搖ごとに支配機構内部に吸収され彼等の要求や綱領は統治勢力の觀念的内容物として貧乏に撰取されていつた（このことは同時に統治構造が国家主義団体、その指導分子の母胎である半封建的農業関係と上下関係に立つており、所詮、同質的な共軌的存在であるにすぎないことを示しているのであるが）。かくて絶対主義は不断に在野の前期、国民主義運動を吸収し觀念的機構的に肥大の一途をたどつたのであり、反体制的な民衆運動はつねに国家主義団体幹部にスプリングボードを提供するにとどまり、幹部と統治機構との連繫の直後には弊履のごとく捨て、省みられなかつたのであつて、国家主義の指導分子中においても前述したように在野のある程度民衆の基盤に膺接できた分子は、彼等が民意を貫徹しようとする限りにおいてレジームの危険に不穩分子として屠られるのが歸結であつた。たとえば二・二六事件のため暗々に統殺された北の最後は大量に刑死した叛乱青年將校とともにその在野性を示すものである。——昭和農業恐慌のあふりを食つて呻吟する農民の反体制的抵抗を農村小支配者層のプリズムをとおして（顛倒的にはあるが）すくいあげた青年將校が二・二六事件に蹶起しながらも奉勅命令のため内紛をおこし帰順派が「兵が可愛情だから……」といへば断乎抵抗派が「兵隊が可愛想ですつて……」。全国の農民が可愛想ではないんですか」と応酬するくだりと、北が刑死寸前に同志西田が天皇陛下万才を三唱しようと提言したのを拒んだという挿話<sup>(20)</sup>は彼等が勤勞農民に接着したかぎりの抵抗と苦悶とそれの顛末たる悲劇的終焉とを遺憾なくものがたつてゐるのである。北イズム——「純正社会主義」の在野性は彼の第三人口論の以下の考察によつてますます明確になるであらう。

## (二)

すであきらかなように、俗流マルキシズムと社会進化論との混淆物を「純正社会主義」なりと誇稱した北は社



会有機体説の陥屏に墮ちて国家間の「帝國主義的斗争」を容認し国権論の徒になり終へたのであるが、しかも凡百の国家社会主義者中では異端の階級斗争観や階級国家観の保持と後述するとおりの家族国家観<sub>11</sub>絶対主義イデオロギーにたいする傍若無人の批判とは、後年彼の言説を經典視した革新青年将校や彼等の階級的基盤としての農村中間層のイデオロギーをすくいあげ約現しうる根拠となり得たのであつて、このかぎり金融資本と百千の糸をもつて結びついた絶対主義勢力にとつては早晩「折伏」する要のある不穩分子——反体制的な驕傲な中間階級イデオロギーの伝布、実践者——であつたのである。まことに彼こそ日本型中間層の奔放急進な実践者であり、彼の史観こそ第三<sub>11</sub>中間派史観と呼ぶにふさわしく、易々として一般的危機以降の絶対主義的人口政策——「生めよ殖えよ」を代弁し得た高田博士の自称「第三史観」の称呼は甘んじて北に献呈さるべき性質のものであつた。<sub>(補註)</sub>われわれは徳富の「大日本膨脹論」と高田博士の「貧者心勝」「国民耐乏」論をもつて日本人口論の主潮であり、それゆえこれを第一人口論と称呼してはばからないのであるが、北の人口論はその史観とともに統治勢力と合生し得る底の源流でも主流でもなく、逆に異端者流であり傍流であると断ずるがゆえに、第三人口論の称呼を献呈し、その中間派人口論なるゆえんを以下に検証してみたいとおもうのである。以下にあきらかなように北人口論は俗流マルサス説と社会有機体説との吻合による、社会<sub>11</sub>貧困問題<sub>11</sub>絶対的過剩人口<sub>11</sub>移植民<sub>11</sub>領土膨脹なる第一人口論のロジックに異論をさしはさんでおり、しかもこの第一人口論の盛行に対抗して帝國主義揚棄のため最初の日本人口論批判を展開し得た幸徳のいわゆる「階級的人口論」<sub>(22)</sub>第二人口論にも同調しえない性質のものであつたのである。——

〔補註〕 高田博士の自称に従つて博士の史観をその経済学とともに「第二史観」<sub>11</sub>「中間派史観」<sub>11</sub>「中間派経済学」とみるのは今日通説となつてゐる。たとえばマルキシズムの立場からのものとも先駆的な高田社会学批判たる福本和夫「唯物史観と中間史観」<sub>(23)</sub>

(大正一五年)、同氏「経済学批判のために」(昭和三年)、大道安次郎「インテリゲンチヤ」(三木編「哲学辞典」所収)等々。しかし続稿で析出するように、高田博士の人口論は新らしい情勢のもとで粉装した日本社会学Ⅱ社会有機体説とマルサス説との吻合によつて成り、日本第一人口論の一般的特質を形成し得ており、絶対主義ポピュレイシヨニズムをみごとに代弁しているのである。前稿で筆者が究明したように日本第一人口論の定型はマルサシズムと社会有機体説——しかもブルジョア有機体説とを日本の節にかけて前期的有機体説を圧倒的に優越せしめた——の吻合形態であつたが、以下に述べるように北の第三人口論はマルサス説を否認し、前期的有機体説を却下し、むしろ「洋魂和才」的にブルジョア社会有機体説、社会進化論の比重が強いのは注目され、これ第三形態の日本人口論たるゆえんともいえよう。

北は本書(国民論及び純正社会主義)の第三篇「生物進化論と社会哲学」の第七章をほとんど自らの第三人口論の教義に宛てゝいるが、彼は冒頭まずマルサス説にたいする論駁を以下のようにおこなつてゐる。——

「若し、個人主義の経済学者ミルが解釈したる如く、マルサスの人口論とは社会の前途に横たわれる鉄壁と云う意味にあらずして現在の社会の下に敷かれたる網なりとの義ならば、是れ或る程度までの事実なり、何となれば彼等は斯の社会を解釈するに個人を集せる関係若しくは状態と解する個人主義者なればなり。即ち、社会を以て社会其れ自身の目的の爲めに進化し其の過程をして幾多の現象を呈すとして解せず、貧民階級の貧困なる所以を貧民自身の個人として道德的責任となし、爾等が子を産み過ぐる故の自業自得なりと云うに過ぎざる也。露骨に言へば、資本家階級の淫蕩逸楽は富有なる個人の権利にして、貧乏人は貧困に伴う生殖行為を抑制するの個人的義務を忘却するが故なりと云うに過ぎざるなり。吾人は今日の勞働者階級で他の高雅なる精神的快樂なきが爲めに、又幼少より肉慾を挑発さるべき境遇に置かるゝが故に、多く生殖行為を愉樂として取扱ひ……其の生殖慾を著しく昂進せしめたる者なることを否む者に非ず。而しながら不幸なる境遇によりて不幸になされたる彼等に一切貧困の責任を負担せしむるならば、吾人は実に等しく不幸なる境遇によりて不幸になされたる資本家階級の淫蕩を寛過しつつあるの寛大を止めざるべからず。斯れが人面を備へたる者の口にすべきことか、掠奪は淫荒の権利を作り貧困は生物として欠くべからざ

る義務を消滅せしむと云う。……貧民の生殖慾が熾烈なるを以てこそ今日の経済的貴族は維持せらる。僧侶の身を以て人の闇中にまで容喙すとは何事ぞ。」<sup>(25)</sup>

さらに北は百方言をつらねてマルサスのいう「道德的抑制」が「淫荒」をきわめる経済的貴族が貧民の「闇中」まで容喙「するところの悪業であり、自らの道德的責任を哀れむべき貧民の個人的責任に転嫁して憚らない潜越であると断じているのである。このようなマルサス説にたいする痛烈な批判、その「道德的抑制」論の階級的把握は当年にあつてはいかなる意義をもつものであるか。」<sup>(補註)</sup>

〔補註〕 北の人口論はもちろん彼の経済思想——日本経済学(とくに日本歴史学派)批判は、本書が発禁処分<sup>(26)</sup>に遭い播布が乏しかったことも一因となつて、不幸にして今日まで科学的分析の榮に浴してははず、むしろ埋没の厄にあつてきたといつた方が事実に近いであろう。「私が使用したのは河上博士の書き込みがいたるところになされ、興味深い。」ただ大塚金之助博士だけはいちやく戦前に着目され「経済思想史要領」(岩波、日本資本主義発達史講座第二部所収)で、日露戦争から世界大戦にいたる十年間を一括しこの期の経済学の特徴として社会主義の発展の反映を指摘、「ブルジョア経済学批判、北輝次——『××××××の経済学』(明治三十九年)、哲学——北輝次、明治三十九年」とメモされているが——博士の執筆最中の逮捕のためそのまゝ中絶したものの——、これは北輝次郎「国体論及び純正社会主義」明治三十九年のことであろう。ただし一著「国体論及び純正社会主義」が発禁にあつたや北は当局の目をのがれるためこれを「純正社会主義の経済学」と「純正社会主義の哲学」とさらに「日本国の法学的歴史哲学的研究」と三分冊にわかつて刊行せんとしたが、前二分冊のみは漸く日の目をみたにかゝわらず、最後の一冊は家族国家に絶対主義イデオロギーと抵触する国体観のためついに分刊すら不能に陥つたのであり、大塚博士はこの分冊発刊の前二著を閲読、評価されたのであろう。

まづマルサスの「道德的抑制」論の真意義を理解することからはじめよう。彼は「人口論」第二版において「彼等(貧民のこと——市原)自身が彼等の貧困の原因であるということ。救済の手段は彼等自身の手中に存し、他の何人の手中にもなきこと。彼等が住む社会、それを支配する政府はこの点に関し何らかの権限をもっていること。」<sup>(28)</sup>を確認し、さらに「経済原論」中においても「貧民自身の知識と慎重とが、絶対的に彼等の境遇の何等か一般的且つ永久的改善に及びすことあるべき唯一の手段であることは明瞭である。事実彼等自身が彼等の運命の裁決者である」と述べており、またそれよりはやく「人口論」第一版にあつても「下層階級自らが彼等自身の貧困の原因である」ことを納得しかの「道德的抑制」によつて純潔をまもり晩婚を選ぶことが必要であり、それによつて彼等は極貧者におちこむことなく「一般に比較的善良な習慣をもつ中流階級 *middle class of Society*」に接近できる。しかしそれは下層階級中「慎重」「責任感」「勤勉」等の徳性をもち「道德的抑制」をまもり得たものだけが「中流階級の仲間入りをし、他のものは依然として下層の貧民としてとゞまる。社会全体としては、上流、中流、下層の三階層が存在することが望ましく、このことがむしろ当然の状態である」として<sup>(30)</sup>いる。

いうまでもなく、こゝでマルサスの所謂「道德的抑制」*moral restraint*とは「予防的抑制」*preventive check*のうが、結婚回避に「乱雑な性的満足」*irregular gratification*をやもなわなないもので、「われわれが家族を養ひ得るに至るまで結婚をよし控え、その期間完全に道德的行為をなすこと」<sup>(31)</sup>であつた。これは「われわれの境遇を改善せんと欲望」<sup>(32)</sup>つまり「社会的治療刀」の要求を人口減少によつて達成せんとする方法であつて、マルサスがこの「道德的抑制」をもつて永久的改善の唯一の方策としたわけは、食物増加の方法が到底持続的効果をあげないと信じたからで、下層貧民の人口増加を抑制する方策中もつとも弊害のすくないものとして勸奨したのであつた。<sup>(33)</sup>

一方「自由社会」の基本矛盾の現象形態である「人口過剰のもとでの資本の過剰」(資本論第三卷)はマルサスによれば有効需要の過少のためおきるのであり、この資本主義的恐慌にたいするマルサスの処方箋は「一國の自然的資源を充分に發揮せしめるために必要な勢力を喚起するにたくべからざる」不生産階級の不生産的消費——日本の通俗表現をすれば「奢侈」ないし「贅沢」——、とくに「疑いもなく優越せる地位にたつ」地主階級のその勸奨にあつたことはいうまでもなく、こゝにマルサス説のレントナー的地主的性格が約現されてるのであるが、マルクスはこれらのことを次のように指摘している。——「マルサスはブルジョアの生産の矛盾を隠蔽することに関心をもつていない、それどころではなく、むしろ暴露することに関心をもちつてゐるのである、一方において労働者階級の貧困を心然なるものとして論証するために、他方においては、資本家たちに向つて飽食暖衣の教会(34)および国家僧侶は彼等にとつての過渡の需要を創造するのに不可欠であることを論証するために」と。マルサスの「經濟貴族の淫荒」の黙認と「道德的抑制」をもつてする貧民の「閨房生活への容喙」に筆誅をくわえた北はさらに彼等の奢侈と懶惰にも鞭打つており、その限り彼のマルサス人口論批判はその「道德的抑制」論の駁批においてほぼ階級の核心を射ているとおもわれる。

ところで当年において「日本のスミス」田口卯吉はけつしてマルサスの「道德的抑制」を正解してゐない。——彼は明治三五年九月二十日の東洋經濟雜誌一一五〇——一六三号に「人口論」と題してマルサス批判をこゝろみ、異見の第一に「マルサスの意見は社会的にして余輩の意見は個人的なるものなり」とし、「マルサス曰く、人口増殖の勢は地球の表面立錐の地なきに至るも尚ほ止まらざらんとするなり、故に人は終に餓死を免れず、と。然れども人口増殖の極点に至るも、三井、三菱の富あり、……能く餓死を免がるべし、而して財なく智なきものは今日の

社会に於ても尚ほ餓死を免がれざるべし、故に平前予防的抑制は社会的に忠告すべきものにあらず<sup>(35)</sup>」「人口論を社会的に論ずるは誤謬なり。富人若くは有力の人に於ては世人に頓首せずして遠慮会釈なく多子を産出して可なり、唯々貧民若くは無力の人に於ては、十分に考慮して終身の計を立つべきなり。マルサスの訓誡は独り此の如き無力の人に適用すべきものなり<sup>(36)</sup>」、一言にしていえばマルサスは「予防的抑制」を三井、三菱をふくむ社会総体についてはなく、むしろ下層貧民階級に限つて忠告すべきである、というのであつた。だが、当のマルサスこそ、むしろ下層貧民階級に限つて「予防的抑制」を階級的に要求していたこと右に述べたごとくである。——「日本のスミス」の、初歩的なマルサス説<sup>(37)</sup>「道德的抑制」論の誤解であるといわなければならぬ。また大内兵衛博士は河上肇「貧乏物語」(大正六年初版、昭和二年岩波文庫再版)の解説において、それが貧乏根絶の三方策の第一に富者の奢侈贅沢の廃止をとなえたのを指摘され「著者が実際に採用して有効なものとしてあげた方策は、何と、第一策たる奢侈の廃止だつたのである。社会政策も社会主義もこれによらなかつたのである。いひかえれば、河上博士は、このときなお純然たるマルサス主義者に過ぎなかつた。彼は東洋のマルサスとして道德的抑制を以て、この世界的な問題を解きうるとしたのである。」<sup>(38)</sup>と述べられ、河上博士が廃止を叫んだ戦時成金の「奢侈」をマルサスのいわゆる「道德的抑制」の要求と等置されておられるのであるが、これは正しいであらうか。すでにあきらかなように、マルサス説は不生産的消費の勸奨によつて有効需用を創出しこれを恐慌処理策としているにかゝらず、河上説は大戦成金の「奢侈」<sup>(39)</sup>「不生産的消費」の抑制をもつて逆に大戦時貧富の階級的懸隔<sup>(40)</sup>社会問題の処方箋としていたのであり、かくて河上説は「東洋のマルサス」説と無縁であるにとどまらず積極的に道学者的見地よりする反マルサス主義者としてたちあらわれているのであつて、大内博士はマルサスの「道德的抑制」論の階級的核心を看過、

誤認されたというのほかない。<sup>(補註)</sup>

〔補註〕「貧乏物語」段階の河上博士は大戦によつて拡大再生産された貧困<sup>II</sup>社会問題を、スマート William Smart (1883~1915) 流——彼はロマン的市民社会批判・人道主義者のカーライル Thomas Carlyle (1795~1881) の影響の下にあつた人道経済学者であつたが——の人道経済学的見地より経済社会の道德的改造により解決せんとしたものであつて、<sup>(99)</sup>さらに旧来の日本歴史学派の社会政策論をも加味していたのであり、大内博士のこの段階の河上博士理解はまったく誤つてゐるが、その詳説は続稿に俟ちたい。固みに大内博士のマルサス「道德的抑制」論の誤解に基脚した「貧乏物語」の誤つた評価——東洋のマルサス主義著作とする——が他の論者によつて無批判に踏襲されていることは遺憾にたえない、たとえば榎西光速氏、大井正氏、<sup>(10)</sup>等によつて。すでに前稿で述べたようにバステリア型もしくはミル型の第二期俗流経済学に伴伴されて愛容された人口論の主流——マルサス説は、昭和人口論争の日迄一般理論として上降し党派の検討の場にのぼることなく、ひたすら下降し早激的に容実践場に実用されつゝ俗流化の一途をたどつていつたのであるが、かくて日本人口論の一特質を形成することになつた俗流マルサス説の負債は日本のスミス田口卯吉、日本マルクス経済学の先達大内博士、日本社会学、近代経済学の泰斗高田博士によつても清算されていないのであつて、「経済学の生きた地盤」を缺き「外国の現実に適した理論的表現が小市民的世界の意味で解釈されかくて曲解され」「依然として単なる生徒であり、盲従者であり、外国の卸売商店の小さな行商人」にすぎなかつたドイツ以下の環境の裡で、「ドイツ経済学は国民的科學として歴史学派をうみだしたではないか」しかも日本マルキシズムの揺籃期における、北の如上のようなマルサス批判はその「ブルジョア経済学批判」(大塚博士)とともに珍重にあたいたといわねばならない。——もつとも次にみるごとく、ただちに俗流型、統計的マルサス批判者流に棹さすのであるが。

すなわち北は論をつらねて「算術級数と幾何級数と云ふ独断より統計の取扱ひを誤まる」としてマルサス説を次

のごとく統計的に批判するのである。――

「算術級数と幾何級数と云う如き野蛮人よりも数の概念の不明確なるは誠に劣等なる頭腦なりと云う外なく。爾来一百年の長き間無數の学者によりて継承せられて一種の經典の如くなり、権力階級に執られては残忍暴戾なる庄虐となりて下層階級に臨み来りとは人類の靈智も怪しむべき者なるかな。而も今尚マルサスより幾何級数の勢を以て増加し来れる靈智ある經濟学者、特に靈智ある金井延博士の如きは曰く『地球全体を開墾すとも人類は三階五階の家を建て空中にまで増加するが故に人口増加は避くべからず』と。人類の靈智も極まるかな。然しながら、如何なる下等なる学者と雖も輕蔑を以て経過すべからず。彼等の下等なる者に於ては眞理を語るよりも単に當時の大勢の後へに附随して大勢たるものを反響する者なり。大勢ならば如何に価値なき者と雖も充分に惑を解かざるべからず。而してマルサスの人口論は下等ならざる貴き金井博士の今尚以て社会主義に對抗しつゝ、最後の城砦となしつゝあるを見れば全く大勢なることは看過すべからざるなり。<sup>(42)</sup>」と。

この北の立言は、彼が筆誅の対象とした当の金井博士のマルサス解釈とまつたく異句同音であり、日本人人口論の通弊としてのマルサス説の俗流的解釈に基脚している。マルサスが自然的人口原理として二十五年人口倍加、あるいは幾何級数的人口増加をもつてかたつたのは、人口統計にいう出生率とか人口の自然増加率とかの具体的数字ではけつして表現しえない抽象的伏能力のことであり、これが発現のばあいならんらかの原因によつて「妨げ」られるから現実の人口増加はあらゆるばあいに伏能的な増加力より遙かにすくないのであつた。極言すると絶対的減少でもよいのであり、この伏能力が具体的にいかなる統計的数字でしめされるかは絶対に計測しえないのであつた。マルサスがおそらく、マルクスが実体的伏能的な「労働力」概念と現実機能的な「労働」概念との分離によつて剰余価値説をうちたてたのとひとしく、自説の、隅の首石ともして分離・使用している人口「増加力」概念と現実の人口「増加」概念の混同・同一視に立脚して統計的視角からマルサス批判の征矢を射るとき、われわれはこれを俗流



の「統計的マルサス批判」<sup>(43)</sup>と呼ぶに躊躇しないのである。だが北のおちいつた俗流的マルサス説解釈は既述のように日本人口論の一般的特質を形成しており、当年において、たとえば田口卯吉もこの弊をいささかも免れていない。

田口は「人口論」(明治三五年九月二〇日東洋経済新報、前掲)でマルサス説にたいする異見の第三として、「マルサスが食物の増加は算術的なりと云えるのは全く無意味なり。」と題して、たとえば聖武年代より明治三十年にいたる本邦人口増加の統計数字を拉しきたつて、これを醍醐年代より明治二八年にいたる田積増加の統計数字と対比せしめ、「故に余輩はマルサス説に反し人口増加の憂は文明の進歩に従い大に薄らぎたる事を認めざるを得ず」と帰結している。<sup>(44)</sup>彼もまた依然として、俗流的マルサス解釈の負債を清算していない。

およそ右のように、北は、当年にあつて稀有なマルサス批判をブルジョア経済学批判をともしなしたのち理論的に下降・深化することなく、一転して統計的マルサス批判者の亜流につらなり、マルサスを譴しダーウィンを賛し「ダーウィンの偉大な生物種属は其の種属の生存進化の爲めに必要なだけの子を産むと云う生物学よりの帰納にあり」「目的論の哲学系統は生物進化論によりて科学的に決定せられた」として「人口過多は貧民階級其れ自体の爲めにも必要なり」とする。なにゆえか。「彼等は其子沢山なくんば遠き以前に於て永き命は絶たれたるべく、即ち生存競争の完き劣敗者として滅亡したりしなり」<sup>(45)</sup>「又下層階級の人口過多と云う理由は貧困の外に戦争の劣敗者が悉く下層社会より出づるが爲めなり。——即ち、彼等は横の階級斗争に於て多くの犠牲を余儀なくさるゝ如く、縦の国家競争に於て常に劣敗者となり。即ち貧困よりの余儀なき子沢山ある如く、戦争の爲めに必要な結果として人口過多の声あるなり」<sup>(46)</sup>とするのである。かくて北は「鶯は美音あるが故に歌ふに非らず、胡蝶は麗翹あるが故に舞ふに非らずして、歌わんとする目的、舞わんとする理想あるが故に美音と麗翹とを生したるなりと云へ

る如く。生物進化の宇宙目的論によりて日本今日の過多なる人口は、人口過多なるが故に戦争生ずるに非らず、戦争を目的とする中世的思想の国民、戦争によりて優勝者たらんとする野蛮なる理想の国家なるが故に増殖しつつある天則なり。天則は嘯まんことを目的とする蛇に毒を賜ひ、喰わんことを理想とする狼に牙を賜ふ。国民と国家とが此の蛇の如き目的と狼の如き理想とより脱却せざる間は、日本民族は永久に下等動物の天則を被りて人口過多に苦しむべし。」と目的論的社會進化論に立脚する過剰人口論を展開、これをもつて人口と食料の増殖率の落差にもとづくマルサスの人口原理に代替せしめているのである。したがつて「日本の今日に於て年々五十万の率を以て増加しつつある人口は、群雄戦国の中世史の初めより徳川の貴族階級の下に掠奪せられし終末と共に、即ち戦争と貧困との長き継続と共に經濟的貴族国の下に依然たる貧困を継続せしを以て、日本民族としての生存を維持せんが爲めの必要に伴ふ人口にして。戦争は人口の捌口を滿韓に求めたるにあらず、未開時代の国家競争を要求する国民の思想の爲めに、戦争及び戦争に伴う貧困によつて劣敗者として多くの人口を生じたるなり。」とされるのであり、日露戦争は尊王攘夷論の継承としての国民精神、つまり「未開時代の国家競争を要求する国民の思想の爲めに」おきたのであつて、こゝに目的論的進化論が形而上学的觀念史觀に墮し去つた顛末をみる事ができる。さらに北は日露戦争に關し次のごとく第三人口論を提言して憚らないのである。――

「故に彼の日露戦争に於て主戰論を取れる帝國主義者と稱する者が人口の捌口を要すと云うを理由とせる如き、又非戰論を唱へたる社會主義者が其の意氣の壮なりしに係わらず未だ誠に無勢力なる二三子の資本家の爲めに戦はれしと解したる如き、価値なき皮相の説明に止まりしを遺憾とす。」<sup>(49)</sup>

「而して階級的感情を超越して云えば、今の下層階級は上層の者と等しくこの低度なる進化の途にあり。故に社會主義は國際戦

争に導き易き専制の制度を去り、資本家の貿易戦争をなしつつある産業的専制制度を顛覆すると共に一層深く国民国家の目的とする所理想とする所より革命せんとする者なり。進化律が營に毒を与え胡蝶に牙を与えざる如く、世界連邦の下に万国平和を目的とし理想とする社会主義時代に於て何の人口過多あらんや。」

観念過多の「階級的感情を超越し」た第三人口論はさらに敷衍される。――

「吾人は純正社会主義として凡ての階級的感情若しくは利益の上に超越して科学的研究の態度を汚辱すべからず。即ち人口論を資本階級の傍より個人主義を以て解釈して個人としての貧民に道德的責任を負担せしむるところの誤謬なると同様に、下層階級の傍より個人主義を以て人口論を拒絶し資本家が貧慾非道なるが故に貧困なりと論ずることの誠に社会主義と少しも聯結なき狭断論の者なりと云ふことなり。<sup>(50)</sup>」

北の「純正社会主義」の「純正」とは「凡ての階級的感情若しくは利益の上に超越した科学的研究の態度」のことであつた！ 彼は日本講壇社会主義を鵠的性格の阿諛者流と断じて最大限の非難を浴びせたが、ことなつた意味において彼の人口論もまた鵠的であつた。――以下に述べる彼の国体観——ひろくいえば史観——が超越的の中間階級の視点よりする矯激な第三国体論、第三史観であつたのとひとしく、彼の人口論もまた第三人口論であつたといふのほかなく、「純正社会主義」はまさに人口論においてもその「純正」性、鵠性を貫徹したといえよう。マルクスは《*Manifest der Kommunistischen Partei, London, 1848*》において「反動的社會主義」中そのイギリス、フランスの形態である(イ)「封建的社會主義」(ロ)「小ブルジョア社會主義」にたいし、ドイツ的形態として(ハ)「ドイツ社會主義または『真正』社會主義」を摘出し、「フランスの社會主義的および共產主義的文献は、ブルジョアジーの圧迫のもとで發生し、この支配にたいする斗争のハ文獻的V表現であるが、これがドイツに輸入された

のは、ちようどドイツのブルジョアジーが封建的絶対主義にたいして斗争をはじめたときのことであつた。ドイツの哲学者や半哲学者や文士たちは、この文献をむさぼりよんだ。ただかれらは、これらの文章がフランスからドイツに編入されたとき、フランスの生活関係はそれと同時に移入されたわけではなかつた、ということをおぼれてゐた。」とし「哲学的言語を……フランスの歴史批判のうらにおしこむことをかれらは『行為の哲学』『真正社会主義』『社会主義にかんするドイツ的科學』『社会主義の哲學的基礎づけ』などと名づけた」と述べ、結局、「真正社会主義」はこのようにして、ドイツ・ブルジョアジーとたゞかう政府の武器となると同時に、また直接には一つの反動的利益を、すなわちドイツの小市民層の利益を代表した」と帰結している。<sup>(51)</sup>——北の「マークスの社会主義にあらず、ルソーの民主主義にあらざる」純正社会主義の提唱——サン・シモンを駆使し、ルイ・ブランを説き、イリーを述べ、ペラミーの『ルッキング・バックワード』に夢を追いつゝ彼等の祖国アメリカ、フランスの「生活関係はそれと同時に移入されたわけではなかつた、ということをおぼれていた」ところの——は、彼がついに日本型「農業社会主義」——ドイツ「真正社会主義」の一亜種たる——に墮して日本型小市民、とくに半封建的農村の小宇宙主の階級的代弁者となり、米騒動——「一般的危機」以降絶対主義にたいし相対的独自性を強めた独占ブルジョアジーにたいする絶対主義上層の示威と脅迫の具に供せられ（昭和十二年の「軍・財抱合」体制によつて新しい条件下における絶対主義と独占ブルジョアジーの鞏固な再結合が完成するまで）、ついに走狗として煮られた最後とあいまつて、自らを十二分に日本型「真正社会主義」者と呼ばしめるであらう。（北の「純正社会主義の普遍的基礎」「日本国の法理的歴史哲學的研究」「純正社会主義の經濟學」なる該著分冊本のタイトルやサブタイトルは「真正社会主義」のまつたくの日本版ではないか）。

【補説】北の第三人口論のマルサス批判がいかなる西欧人口論の移入觀念に依存していたか、以下に憶測してみよう。彼は早稻田  
日本人口論小史（市原）

大学在学中に有賀長雄の憲法論や社会進化論、国体論の講義と著作とはとくに積極的に参堂したといわれるが、さらにいま一人の教授安部磯雄のキリスト教社会主義よりする講義も熱心に聴講し安部の著作——「社会問題解釈法」「社会主義論」「地上の理想地西」等とはとくに貪り読んだといわれ、「国体論及び純正社会主義」中では有賀教授にたいしてはとくに一再ならず指名しその「復古的革命主義」を嘲笑批判しているが、安部教授にたいしてはこの種の論難をまったくくわえていず好対照をなしている。——北は有賀からは刃として返さんため彼から前期的有機体思想を過過ぎさせたブルジョア有機体思想を吸収し——次に述べる彼の天皇機関説の見地よりする絶対主義的国体論批判をみよ——、安部からは自らの「純正」社会主義形成のための糧として「純正」マルキシズムならぬ「俗流」マルキシズムを摂取し、こゝにブルジョア有機体説と俗流マルキシズムの雑炊物として第三人口論、第三国体論を造出したであらうことは容易に想像できる(もちろん北の健啖が該著緒言の末尾で列挙しているように、金井、田島等の日本歴史学派や一木、美濃部等天皇機関説論者、山路、斯波等国家社会党、穂積、井上等絶対主義)。「復古的革命主義」国体論者等を無差別、食傷的に貪り食つたことは事実であるが)。安部は大正十一年に日本にフェビアン協会をおこしたこともわかるように、<sup>(54)</sup>フェビアン・ソシアリストとくにヘンリー・ショーシの影響をアメリカ留学中からうけており、事実、彼は日本における最初の社会主義研究組織たる明治三十一年創立の「社会主義研究会」の第七回例会では、「ヘンリー・ショーシの社会主義」と題し報告、「講演の目的は」「マークスの資本論と共に社会主義者の經典として貴重さるゝ」ヘンリー・ショーシの「『進歩と貧困』Progress and Poverty, 1880」の中にみられた」「最も主なる点を概説する」にあつたのであるが、まづショーシの土地の私有排撃と単税論、ついで賃銀基金説批判が紹介され、やがてこれらと結びつけてマルサス人口論を、(一)「歴史上の事実」がこの理論を「否定す」る、(二)「人類の繁殖を以て下等動物の暴殖に比較するの」に甚だ不当である、(三)下等動物は全く食物の多少に依り其繁殖を制限せらるるが、「人類は意志を動かして食物の増加を来すことを得る」——以上三点にもとづいてショーシが完全に批判しきつたことを演述している。<sup>(55)</sup>フェビアン社会主義の經典たるショーシの「進歩と貧困」が共産党宣言や資本論を除くと世界でもつとも多くの人々に読まれた経済学者であることは周知であるが(発行部数無慮七

〇〇万部にたつするといわれほとんど万国語によつて訳出されている<sup>(56)</sup>。日本においてもいち早く自由民権論者で山路愛山をして「日本に於ける社会政策論者として実に陳勝、吳広の名を博すべき」といわしめた城泉太郎編述の「賦税全廢濟世危言」を手始めに、翌二十五年に江口三省訳「社会問題」、同年角田剛一郎訳「土地問題」等々続々とジョージ原著の移植入がはかられたのであつて、その土地国有論とともにマルサス批判をふくむ人口論が城のごとき民権家、宮崎民蔵、「単税太郎」ガルス（アメリカの宣教師）のような土地均分論者や単税論者<sup>(57)</sup>、堺、幸徳のような社会主義者によつて受容されていたことは否めないのである。北もまたこれらの系流につらなりジョージからマルサス批判の手法を学んでいることは安部を媒介にしていると否とにかつわらずいえることであつて、彼の該著人口論を巨細に検討すればこのことはただちに判然とするにちがいない。

### 〔三〕

われわれは最後に、さらに北の中間派<sup>Ⅱ</sup>第三人口論の基本規定を傍証せんがため、彼の国体論、日本史観の第三<sup>Ⅱ</sup>中間派的性格を折出せんとするものである。この第三国体論こそ序文十七頁、目次六十八頁、本文九百九十八頁の菊版の大著を發禁にいたらしめ最大の因子であつた。けだし日露戦争後の飴細工的軍・封・帝國主義の植民地経営からむ内的矛盾の拡大再生産と公債増募、増税にともなう国民生活の一般的窮乏化、なかんづく労働争議の昂揚（明治四十年に警察、軍隊を大動員せしめた足尾、別子両銅山の騒動がおきているのをみよ）は社会主義の組織宣伝活動を助成せしめたのであり、これらの諸事態に対処して絶対主義政府は第二期家族国家観の本格的形成に着手しはじめたのであつて、絶対主義的国体論にたいする征矢こそ政府の心臓を射ることにほかならなかつたからである。明治四十一年に成立した桂内閣こそ幸徳事件を挑発し社会主義の冬の時代を招来、これと相即して社会政策を日程化しつゝ本格的に家族国家観を教学体系を中心に形成せしめていつた元兇なのであるが、逆に北の矯激な中間派

史観こそかゝる絶対主義と独占ブルジョアジーの新たな条件下におけるブロック勢力の推進する社会政策理念や絶対主義イデオロギーの撒布に反撥せざるをえなかつたのであり、彼の日本講壇社会主義派(金井延他)にたいする仮藉ない筆誅や以下に述べる家族国家観——「復古的革命主義」の信奉・伝布者にたいする忌憚のない駁論はこれらことを明白にものがたつてゐる。

北は第四編「所謂国体論の復古革命主義」において開口一番に次のごとくいう。——

「以上三編、社会主義に関する重要な譏諷を排除し、其の根本の理論たるべき者の大要を説述したり、社会主義の論究はかくの如くにして略々足れりとすべきなり。只此の日本と名づけられたる国土に於て、社会主義が唱道せらるゝに当りては、特別に即ち所謂国体論と称せらるゝ所のものにして——社会主義は国体に抵触するや否や——という恐るべき問題なり。是れ敢て社会主義のみに限らず、如何なる新思想の入り来る時にも必ず常に審問さるゝ所にして、此の国体論という羅馬法皇の諱忌にふれることは即ちその思想が絞殺さるゝ宣告なり。政論家も是れあるがためにその自由なる舌を縛せられて、専制治下の奴隸農奴の如く、これあるがために、新聞記者は、醜怪きわまる便佞阿諛の討問的文字を羅列してはちらず、これあるがために大学教授より小学教師に至るまで、すべての倫理学説と道德論とを毀傷汚辱し、これあるがために基督教も仏教も各々墮落して偶像教となり、以て度々他を国体に危険なりとして誹謗し排撃す。斯くの如くなれば今日社会主義が学者と政府とよりして国体に抵触すとして排撃さるゝは固より事の当然なるべしと雖も、只欺すべきは社会主義者ともあらんものが此の羅馬法皇の面前に立ちて嚴格なる答弁を為さざることなり。少くとも国体に抵触すと考ふるならば公言の危きを避くるに沈黙の途あり、然るに弁を巧みにして抵触せずと云ひ、甚しきに一致すと論じて逃るゝが如きは日本に於てのみ見らるべき不面目なり。特に彼の国家社会主義を唱道すと云う者の如きに至りては、却つて此の『国体論』の上に社会主義を築かんとするが如きの醜態、誠に以て社会主義の暗殺者なりとすべし」<sup>(55)</sup>

かくて北は絶対主義の官許のもとにあらゆる学問と教育と文物との窮極の価値基準とされるにいたつた踏絵——  
 国体論を山僧のかつぎまわる神輿に類比する。「僧兵の神輿中に未だ曾つて真の神のありし事なきが」ごとく、国  
 体論中に真の天皇はなく、あるものは「国家の本質及び法理に対する無智と、神道の迷信と、奴隸道徳と、顛倒せ  
 る虚妄の歴史とを以て捏造せる土人部落の土偶」だけであるとし、日本天皇をこの土偶的天皇に帰せしめようとす  
 る絶対主義のイデオログ穂積八末、有賀長雄等を「国体論の復古的革命主義」者だと罵倒する。<sup>(60)</sup> この絶対主義的  
 国体論と抱合しその基礎の上に社会主義を唱道する者、すなわち山路愛山流の国家社会主義を社会主義自体の暗殺者  
 として軽蔑する。事実、山路が斯波等と共に創設した「日本国家社会党」の「主張」はその第一に「吾人は大日本  
 の国体は、家人なるの情を以て君臣を團結し、国家の権力に依りて共同生活の大義を遂行すべきものなることを主  
 張す」と述べていたのである。<sup>(61)</sup>

ついで北は今日の日本民族の進化をみる歴史哲学は、皇室一家の伝記とは自ら別種のもので、皇室は「復古的革  
 命主義」者のいうごとく日本歴史の精粹ではありえない。今日の日本を家長国とするのは、異教徒や異人種を国民  
 の義務から解放し、親族法の平等関係によつて民の父母を赤子と平等なりとみる自殺論法である。日本国民が「克  
 ク忠ニ」万世一系の皇統を奉戴したとするのは、羅馬法皇の天動説に等しく、また教育勅語のごときもこれと同類  
 の「蛮神の宣言」である。「近代国家の原則として国家の一部分たる個人の思想、信仰を国家の大部もしくは上層  
 の部分が蹂躪すべからず……良心の内部的生活に立ち入る能はざる国家、従つて其の一機関たる天皇は道徳を強制  
 する能はざるものなり。」<sup>(62)</sup> さらに「『爾臣民克ク忠ニ』とは国家の利益の爲めに天皇の特権を尊重せよと云ふことな  
 り」と述べて第二期家族国家観の形成に着手しつゝある絶対主義の倫理や教学との相互移入による国民の自律生活  
 』<sup>(63)</sup>



への干渉をみごとに反駁しきつていたのである。まことに北の第三国体論は絶対主義官許の穂積、有賀等第一国体論を痛烈に批判し得てブルジョア有機体説の系譜に立ち(天島機関説)日本におけるブルジョア有機体説的国体論への接近)、その天皇象徴概念は前期的有機体説のエーテルにはひたされていずむしろヒットラーの「指導者」<sup>ヒトラー</sup>概念——家長ではなくブルジョア有機体的な「血と土」*Blut und Boden*の象徴たる——に近かつたといえよう。北の「国体論及び純正社会主義」時代の天皇機関説的国体論は、十三年後の「改造法案」においては「国民の総代表」——天皇象徴論に進化しており(「日本改造法案」天皇の部)、穂積、加藤弘之、有賀流の前期的有機体説を核心とする天皇信仰の影はいよいよしめされていない。絶対主義イデオロギーの核心たる国体論における、この日本の風土では稀有なブルジョア有機体説的構造こそ、第三人口論と首尾一貫した矯激な日本中間派——第三国体論の背骨であり、こゝに絶対主義勢力上層、独占ブルジョアジーが凡百の日本国家社会主義イデオログ中、ひとり北を暗々に葬らねばならなかつた最深の理論的根拠があつたのであつて、二・二六事件こそ家族国家に向けられた北国体論とその影響下にあつた青年将校のこの白い牙を抜きとるために演出され奏でられた葬送譜であつたのである。

われわれは統稿において当年における中間派史観、人口論の保持者北一輝が矯激に拮抗するのを余儀なくせしめた家族国家観の第二期本格的形成、第一人口論の一契機たる日本社会学の教学化・絶対主義イデオロギー化にともなう市民科学としての自律性の喪失、それに代替するものとしての日本講壇社会主義派の登場等の社会的背景を考察し、日本歴史学派——社会政策学会の人口論を俎上に載せつゝその一般的危機以降の三分派——分化に昭和人口論争の党派的背景を折出してみたいとおもう。

【補註】 田中惣五郎氏は北一輝を「日本ファシズムの源流」なる本質規定において把握される。しかし「ドイツ真正社会主義」が

「ドイツ・ブルジョア」とたゞかう絶対主義的政府の武器となつた」(マルクス)のとまつたく同様に、北の「純正社会主義」もまた日本絶対主義が一般的危機以降独自性をつよめた独占ブルジョアとたゞかう武器となつたことを確認するならば、彼を「日本ファシズムの源流」として把握することが巨視的通俗的視点を超えていないことが判るのであり、わたくしは北人口論とその国体論と相即せしめつゝこの点を徹視の本質的に究明したのである。このわたくしの所論の与件として当然わたくしなりの絶対主義国家論が前提されているのはもちろんである。服部之總氏は既刊総著作集第五巻で筆者の絶対主義論にたいし貴重な御批判を賜はつたのであり、最近この服部氏の所論に拠つて筆者に無根な批判をくわえる人があらわれたから(祖父江昭二氏「文学評論」一九五五年七月号所収)、わたくしもこゝで服部氏に御答へする形で本論をいささか「補説」することにする。最近いまだに「天皇制ファシズム」論が跡を絶たないけれど、これはもう世界における科学的絶対主義論の今日の成果に照らしていえば、とうてい批判に堪えられぬ底のものである。それは端的にいうと絶対主義に半封建性と半ブルジョア性を折中的にあたえる「地主ブルジョア・ブロック政權」論、つまり均衡論であつて不確定国家論以外の何物でもない。いいふるされたことであるが、一般的危機以降に延命してきた絶対主義統治が金融資本の政策を補佐代行してやるのに吸々としても、それは当然の至理であり、なびとも絶対主義がファシズム的「機能」をはたしたことを疑うものはない。しかも国家論において国家形態の「実体」概念を「機能」概念におきかえ、絶対主義なる本質規定をファシズムなる機能概念に置換するとき、それをわれわれはラスキー流の機能的國家論と呼ぶに躊躇しないであらう。絶対主義が絶対主義の本質を保持するかぎり、一般的危機以降にあつても金融資本のヘゲモニーをいつてはならないのであり、さればこそグーシネンは、日本に現存する絶対主義支配が他の資本主義国のファシズムにけつして劣らない統治形態であることを強調、「迫りつゝあるファシズムという妖怪を使つて現存の絶対主義を美化する」ファシズム論を批判「日本の国家本配は金融資本のヘゲモニーの下におけるブルジョアシーと地主との手中に存する」<sup>(66)</sup>という「性急な誤まれる結論」を厳に戒めたのでなかつたか。ソヴェト絶対主義論の総決算をしめす大百科辞典第二版第一巻(一九四九)の「絶対主義」は、絶対主義が絶対主義であるかぎり地主階級の最後の統治形態であることを確認、地主とブルジョ

アジীরブロック勢力の▲力の均衝▽論が批判されており、また日本にも大きな反響を呼んだドブスウィーシー論争の絶対主義論に関する成果もまたこれと殆んど経庭がない。従つて服部氏の絶対主義論は戦後の世界的な絶対主義論の成果と水準とに目を覆はれたまゝ不確定均衝論に依然として首途つかつておられるので、私は此の批判に服する義務は依然として現在もなおないと考へている。一般的危機以降表面化した絶対主義と独占ブルジョアジীরとの相対的矛盾がついに昭和十二年の「軍・財抱合」によつて新しい条件下の再結合という帰結にたどりつくまでの政治過程については筆者自身別に触れておいたからこゝでは措く(京大経済論叢、第七十二巻第一、二号、第七十三巻第二、三号等)。右のような今日共通な成果をうみだしている科学的な絶対主義本質論を前提にして北一輝の人口論なり国体論なりの本質規定性を論するならばどうなるか。既に述べたように彼の国家社会主義は独占資本はもちろん絶対主義上層勢力でさえ受容包摂しえない絶対主義下の中間階級の矯激な階級代弁者としての牙をもつていたのであり、この牙こそ家族国家とは異質なブルジョア有機体説的構造を内含した彼の「純正社会主義」に存したのであつた(田中氏はムッソリーニ、ヒットラーにさきだつたフアシズム綱領の起草者として北の革命綱領「日本改造法案」を評価されているが、これは北イズムとヒットラーやムッソリーニのフアシズム綱領とのブルジョア有機体説を共軛平面とする類似性を指摘されたものとすれば、妥当といわねばならない。尚、北が三井の池田成彬その他から資金を強要していた事実をあげて北のフアシズム性を挙証する天皇制フアシズム論者がいるが、これが喜劇的暴論であること、いうまでもない)。だが北の悲劇は北イズムが、ナチスとは異質なそれ以前の国家形態たる絶対主義下の日本において書かれたと一点にのみ存した。既述したように絶対主義国家は近代的階級対立を政治的次元において公認しえぬ「後期家産国家」(ウェーバー)であり、ローゼンベルグのいはゆる社会主義的有機体説(既述)は予防階級戦原理に立つ日本型「後期家産国家」においても到底容認しえない不穩思想にほかならなかつた。事実、山路、斯波流の、絶対主義的国体論と抱合しえた国家社会主義とは異なり、天皇機関説ブルジョア有機体説的国体論を踏まえた彼の「純正社会主義」は、一般的危機、とくに大恐慌の波及以来激化した農村内部の半封建的階級斗争を顛倒的反映形態ではあるにしろ農村対都市の二元的対立、従つて反財閥的農本主義的实践にたいする指導理念に転化

することができたのであつた。農村小支配層の顛倒観念形態であるにせよ、国内、とくに農村内部の基本矛盾が都市対農村の従属、副次的矛盾にすりかえられてくみあげられたかぎり、この副次的矛盾ですら所詮否定し圧殺し去らなければならなかつた絶対主義上層——独占資本と百千の糸をもつて結びつけられた——とは共に天を載きえぬのであり、北の悲劇は彼がナチス・ドイツ下でなく日本絶対主義下の中間層の意志を代弁しつつ勤、勞、農、民に、一応、觸、接、した限りに、おいてのものであつた。わたくしは社会主義理論形成期における早熟な社会進化論の体現者、それと俗流マルキシズムとの合生者北の「純正社会主義」に明治社会主義の暗い運命の一端を探るとともに、彼の人口論に絶対主義下中間層の矯激な階級的代弁としての第三人口論の規定性を析出し得たと信じる。

註(1) 田中惣五郎「日本ファシズムの源流」九二八頁。

(2) 同右、九四—九七頁。

(3) 同右、一一〇頁。

(4) 北輝次郎「国体論及び純正社会主義」二二二頁。以下「純正社会主義」と略称する。

(5) 同右、二九一—三二八頁。

(6) 同右、二五六—二五七頁。

(7) 同右、九二六頁。

(8) 同右、九二八頁。

(9) 同右、緒言、二頁。

(10) 同右、九一二頁。

(11) 同右、緒言八—九頁。

(12) 山田盛太郎「日本資本主義分析」二二五頁。

(13) 「純正社会主義」九九—九九三頁。

(14) 同右、八六九—八七〇頁。

(15) 同右、八九九頁。

(16) 山本勝之助「日本を亡ぼしたもの」一三頁。

- (17) 丸山真男「日本フアンシズムの思想と行動」(東洋文化講底(2)所収) 一三六頁。
- (18) 上来「前期的」国民主義とともに「前期的」有様体説なる範疇を頻用しているがこゝで若干の註説をしておくなら、大塚久雄教授が厳密に使用された「前期的」資本といったばあいの、「前期的」と同義であり、念のために丸山真男「日本政治思想史研究」あとがき一〇頁参照。さらに「前期的」国民主義は「ブルジョア」国民主義と対照して使用してあり、丸山真男「超国家主義の論理と心理」世界、昭和二十一年五月号、参照。
- (19) 新井勲「陸軍よさらば」二三頁。
- (20) 田中惣五郎「日本フアンシズムの源流」三九三頁。
- (21) 高田保馬「階級及第三史観」(一九二五年)
- (22) 吉田秀夫「マルサス以後の人口論」(小樽高商、百年記念マルサス研究) 三四二頁。
- (23) 福本和夫「唯物史観と中間派史観」六九頁以下。
- (24) 大道安次郎「インテリゲンチヤ」(三木清編「哲学辞典」所収) 五四頁以下。
- (15) 「純正社会主義」三三五—三三六頁。
- (26) 大塚金之助「経済思想史(要領)」(日本資本主義発達史講座、第二部) 一五頁。
- (27) 田中惣五郎「日本フアンシズムの源流」一〇二、一〇六、一一三頁。
- (28) *Essay, 2nd ed.*, p. 507.
- (29) *Principle*, ed., p. 299.
- (30) *Essay, 1st ed.*, p. 283.
- (31) *ibid.* 3rd ed., vol. I, p. 337; 6th ed., vol. II, p. 283.
- (32) *ibid.* 2nd ed., pp. 598—599; 6th ed., vol. I, p. 433.
- (33) 伊藤久秋「道徳的抑制に就て」(「マルサス人口論の研究」第十章) 二〇六頁以下参照。
- (34) *Theorien, Bd. II*, SS. 306—307.
- (35) 田口卯吉全集、第三卷経済(上) 四五二頁。
- (36) 同右、四五九頁。

- (37) 河上肇「貧乏物語」(岩波文庫、戦後新版) 九〇頁。
- (38) 同右、大内兵衛解説一八四頁。
- (39) 河上肇「スマートの『一経済学者の第二思想』」(社会問題管見、初版所收) 参照。
- (40) 揖西光速「河上肇」(向坂逸郎編「近代日本の思想家」所收) 一五一、一五三頁。
- (41) 大井正「日本の思想」四七頁。
- (42) 「純正社会主義」三四一頁。
- (43) 吉田秀夫「日本人口論の史的研究」五七頁。
- (44) 前掲田口卯吉全集第三卷、四五三—四五九頁。
- (45) 「純正社会主義」三七—三七三頁。
- (46) 同右、三七三頁。
- (47) 同右、三七四—三七五頁。
- (48) 同右、三七四頁。
- (49) 同右、三七五頁。
- (50) 同右、三七六頁。
- (51) M.L主義研究所訳、大月書店版、六九—七一頁。
- (52) メーリング「ドイツ社会民主党史」改造文庫版(4) 四九—六〇頁。
- (53) 田中惣五郎「日本ファシズムの源流」二八—二九頁。
- (54) 改造社、現代日本文学全集(99) 五九五頁。
- (55) 明治三二年六月十五日六合雜誌、第二二三号所收、林茂「日本における社会主義研究組織の生誕」東大社研、社会科学  
研究、第一号八〇—八一頁より引載。
- (56) 日本評論社、世界古典文庫、長洲一二解題(上) 三六五頁。
- (57) 住谷悦二「日本経済学史の一齣」二三九—二四〇頁。
- (58) 加田哲二「日本経済学者の話」三一—一頁以下。

日本人口論小史(市原)

六八

- (59) 「純正社会主義」四七四頁以下。
- (60) 同右、四八四頁。
- (61) 岸本英太郎編「明治社会主義史論」青木文庫、一六二頁。
- (62) 「純正社会主義」八四四—八四五頁。
- (63) 同右、八四九頁。
- (64) 昭部之総全著作集第五卷(理論社)三三二頁。
- (65) 文学評論一九五五年七月号、祖父江昭二「創造的思想とは何か」三七頁。
- (66) 内田穰吉「日本資本主義論争」(下)附録三九二頁。
- (67) 稻子恒夫氏紹介、名古屋大学「法政論集」第一卷、第一号。
- (68) 田中惣五郎「日本フアシズムの源流」八六五頁。

—以下続—